

令和7年度 第75次 印旛地区教育研修会 安全教育分科会

1 研究主題

地域の特性を踏まえ、学校と保護者・地域が一体となり、
児童の安全と安全意識を高める取り組みについて

2 主題設定の理由

(1) 本校の教育目標の観点から

本校の教育目標は、「豊かな心を育み、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」である。これを受け具体的に、目指す学校像を次のように設定している。

夢と感動にあふれた学校にするために
○あいさつと歌声があふれる学校
○安全・安心で地域に開かれた学校
○学ぶ環境が整い、うるおいのある学校

これを受けて安全教育では、学校・保護者・地域が協働体制を組み、児童が安心して学ぶ環境づくりと安全意識の向上を目指す。

(2) 本校の実態から

本校は、千葉ニュータウン地域の北西部にある。下総台地の強固な地盤の上に位置しており、活断層が認められないことから地震に強く、周辺では大企業のデータセンターの建設が続いている。千葉ニュータウン中央駅を中心とした学区内には、大型ショッピングセンターや図書館があり、利便性に富んでいる。整備された高層マンションや公園に囲まれ、清潔感に満ちた落ち着いた住環境の中に立地しており、児童数1,000人を超える北総教育事務所管内でも有数の大規模校である。周辺道路は、国道464号線や片側2車線の道路が整備されており、交通量も非常に多い。また、北総鉄道を利用して都内等で勤務する保護者が多く見られる。

このような実態を踏まえると、登下校の安全確保や大規模災害発生時の保護者への円滑な引き渡しが課題として挙げられる。具体的には、大勢の児童が登下校する時間帯に、駅やショッピングセンターを利用する歩行者や自転車、自動車と通行が重なったり交わったりすること、大規模災害時に鉄道を利用する保護者が帰宅困難になることが危惧される。これらに対応するためには、児童自らが安全に対する意識を高めるとともに、日常から学校・保護者・地域の協働体制を築いていく必要がある。地域の特性と実態に合わせ、児童一人一人が自分の命は自分で守るという安全意識の向上を図り、教職員が普段から安全意識をもって児童への教育ができるよう、本主題を設定した。

3 研究仮説

(仮説1)

年間を通して学校・保護者・地域が安全教育や安全活動を行うことで、児童と教職員の安全意識の定着が図れるだろう。

学校・保護者・地域が年間を通して、安全教育や安全活動を実施していく。

学校では、毎月1回安全点検を行い、児童の安全を確保すると共に、必要に応じて修理や修理依頼ができるように営繕担当を置く。

また、月1回スポット避難訓練を実施する。地震・不審者対応・Jアラートによる一時避難をすることで、児童の迅速な避難と安全意識の定着を図る。

教職員は、安全意識を高めるための研修を行う。4月初旬にエピペン研修、水泳学習が始める前の5月に救急救命法の講習会を行う。また、教職員がGoogle チャットで緊急な不審者情報や、天候悪化による安全指導の情報共有を確実にできるようにし、常に児童の安全を保てるようにする。

さらに、学校での登校指導や下校指導といった安全指導に加えて、交通量の多い道路での地域の交通安全ボランティア活動や、保護者による放課後の大型ショッピングセンターの見回り活動を行う。地域ボランティアの方には、学校敷地内の樹木の剪定や周辺の緑道の草刈りといった安全な学校環境の維持にも関わる。

これらの活動により、児童は学校だけでなく、家庭や地域でも自分たちの安全の見守りを受け、児童自身の安全意識が定着していくと考えられる。

(仮説2)

地域の実態や児童の生活環境に促した安全教育を行うことで、児童と教職員が自ら考え、安全意識が高まるだろう。

校内や周辺環境から、身近にある危険について様々な場面で考える必要がある。

第3学年の総合的な学習では、安全マップ作りを行う。通学路を歩いて危険だと考える場所を調べ、注意すべき点をマップにまとめる。作った安全マップについて学年内や異学年で発表会を開き、内容を広く共有していく。

委員会活動では、安全委員会が常時活動を通して、児童が主体的に安全な生活について考え、実践する。校内の危険だと考えられる場所での呼びかけ運動や、安全な学校生活についてのポスター作りを行う。また、昼の校内放送を使い、普段の生活での安全面について注意喚起も実施する。

年間の取り組みとして、3回の避難訓練と1回の引き渡し訓練を行う。避難経路を教職員と児童が確認し、いつでも避難できるようにする。また、兄弟関係の連携も取れる体制を整える。

これらの安全教育を通して、どのようなことに注意をすると安全な生活に繋がるかを考えさせ、実践していくことで、児童の安全意識の向上を図ることができると考える。

(仮説3)

学校と保護者・地域が協働して活動することで、児童と教職員の安全意識が高まり、安全が確保できるだろう

本校の地域特性から、学校・保護者・地域の三者が協働体制を築くことが、児童の安全意識の向上には重要であると考えられる。

第1学年が4月の下旬に、交通安全指導員の方を招いて防犯教室を行う。教育委員会の指導主事と警察職員から防犯の仕方を学ぶ。登下校を中心に「いかのおすし」について、実際に起こったことを想定してロールプレイを行うことにより、身近な防犯方法を学習する。

5月上旬には交通安全教室を実施し、講師に交通安全指導員、市民活動推進課職員、教育委員会、警察職員と多くの方を招いている。道路の歩行と自転車の乗り方について実技指導を行い、学校だけでなく、地域全体で児童の安全を守っていることを伝えることが、児童一人一人の安全意識の向上に繋がると考える。

そして、大規模災害時に保護者への円滑な引き渡しを実現するために、引き渡し訓練を実施する。引き渡し名簿を作成し、確実に保護者へ引き渡せるようにしている。また、都心で働いている保護者も多いことから、平日に訓練を実施することで、災害時に学校・保護者・地域の対応を検証できるようにする。

これら三者の活動を協力して行っていくことで、児童の安全を確保するだけでなく、児童自身も安全面に対する意識を高めるとともに、教職員それぞれが自分の役割分担を確認することに繋がると考える。

4 研究の内容・方法

(仮説1)

- ① 安全マニュアルの周知と安全点検の実施
- ② 学期始めと、毎週の登校指導と下校指導
- ③ スポット避難訓練の実施
- ④ 父母と教職員の会（以下父母教と記載）による、登校見守りと放課後の地域巡回
- ⑤ Google チャットを使った情報共有

- ・毎月の安全点検に合わせて、各学年で下校指導を行っている。近隣のマンションの敷地内に入ってしまったたり、歩道を広がって歩いたりする場面があり指導を行っている。登校時よりも児童の安全面の意識が低く感じられる場合もあり、各学年で安全指導につなげている。

③ スポット避難訓練の実施

- ・毎月1回、昼休みや掃除の時間にスポット避難訓練をしている。地震発生の一斉避難、不審者侵入時の対応、Jアラートによる一時避難について訓練を実施している。



④ 父母と教職員の会（父母教）による、登校見守りと放課後の地域巡回

- ・父母教の分担による登校時の交通安全見守り活動を毎日行っている。入学時に一家庭一つ交通安全用の旗を配付し、卒業するまで見守り活動の時に活用している。交通量の多い交差点の横断歩道と、ショッピングモールの車の出入り口にそれぞれ立ってもらい、安全な横断や歩行について声かけしている。
- ・父母教の分担による放課後の地域巡回を毎日行っている。暗くなる前の時刻に、周囲の公園やショッピングモール内のゲームセンターを巡回し、安全面の確認と児童に対して帰宅を呼びかっている。



⑤ Google チャットを使った情報共有

- ・緊急な不審者情報や、天候の悪化による安全な下校指導については、管理職からGoogle チャットで詳しい情報が各担任に配信され、担任は確認するとリアクションを返すことで、確実な情報共有が行えるようにしている。

(仮説2)

地域の実態や児童の生活環境に促した安全教育を行うことで、児童が自ら考え安全意識が高まるだろう。

⑥ 学校周辺の安全マップ作り

- ・第3学年の総合的な学習で、学区の安全マップ作りを行っている。実際に小倉台の住宅地方面と千葉ニュータウン中央駅方面に分かれて学区を歩き、見通しの悪い交差点や交通量の多い道路の横断歩道、子ども110番のステッカーが貼ってある店舗や家等、児童の目線で安全に関係する場所を調べていった。調べた内容は安全マップにまとめ、学年全体での発表会を行い、情報の共有と安全意識の向上を図っている。



⑦ 安全委員会児童の呼びかけ運動、安全ポスター作り

- ・安全委員会の児童が20分の休み時間と昼休みに、歩いて移動するように呼びかけ運動を行っている。昇降口からグラウンドまでのアスファルトの通路や、直線の長い廊下や階段に分かれて、安全な歩行方法を常時活動として広めている。
- ・昼休みの放送で、登下校時の安全面の呼びかけを行っている。内容は、教職員の登校指導や父母と教職員の会の見守り活動での報告書や、代表委員会で挙げた課題から、歩道は広がらずに歩く、歩道の建物側を歩く、横断歩道では挙手をして左右を確認してから渡るといった、登下校のルールを繰り返し呼びかけ児童の安全意識の向上を図っている。

⑧ 避難訓練と引き渡し訓練の実施

- 年度初めに、各学級で引き渡し名簿を作成し、確実に引き渡しができるようにしている。
- 4月と9月と1月に全校で避難訓練を行っている。4月の全校避難訓練では、地震発生時の一・二次避難の方法を知るだけでなく、避難経路・避難場所を知り、引き渡し時の兄弟関係と隊形移動の練習をする。



二次避難の様子



引き渡し訓練：兄弟の下の学年に移動する。

- 6月に保護者の協力による引き渡し訓練を行う。兄弟関係を教員が把握し、引き渡しの流れを確認させる。実際に保護者への引き渡し訓練を行い、引き渡しの手順や保護者が引き渡しに来られなかった場合の対応の確認をしている。



⑨ 教職員の研修

- 養護教諭によるエピペン研修会

全児童のアレルギーを把握するために、アレルギー表とアレルギー時の対応マニュアルを配り、誰がクラスに入っても対応できるようにする。また、エピペンの疑似体験を行う。

- 消防職員による救急救命法の講習会

水泳指導の前に、救急救命法の仕方を学ぶ。AEDの使い方だけでなく、複数での救急救命法も知り、誰でも対応できるように研修を受ける。



(仮説3)

学校と保護者・地域が協働して活動することで、児童と教職員の安全と安全意識が高まるだろう。

⑩ 防犯教室の実施

- ・第1学年が入学した4月に、教育委員会の指導主事と交通安全指導員・警察職員による「防犯教室」を行っている。ランドセルを背負って、ロールプレイを行い、不審者に会ったときの対処を学び、「いかのおすし」を徹底させる。



⑪ 交通安全教室

- ・5月上旬に第1学年と第3学年を対象として、交通安全教室を実施している。講師に交通安全指導員、市民活動推進課職員、教育委員会の指導主事、警察職員の方を招いている。第1学年は歩道や横断歩道の通行の仕方について、学校周辺を歩く実技指導を受け、第3学年では、自転車の点検の仕方やヘルメットのかぶり方、正しい乗り方について指導を受けている。

1年生



3年生



⑫ 安全点検日に行う下校指導

- ・月一の安全点検の日に、学年1人以上が下校指導を行っている。登校と違い、学年によって下校時刻がバラバラなため、該当学年の職員が途中まで一緒に下校をしながら、児童の下校の様子を見て安全を確認している。

⑬ 地域ボランティアによる登下校時の見守りや美化作業

- ・地域住民の方が、毎日交通量の多い交差点の横断歩道での、見守り活動を行っている。雨や雪の日でも活動をしているため、児童が安心して登下校することができる。



横断歩道の手前に二段階に点線を引き、青信号になってもすぐに渡らないように注意喚起をしている。

- ・父母教による美化作業が行われている。5月は校外の草刈りや除草作業、学年ごとの校内の窓掃除を実施している。学校の敷地内の樹木の剪定や周囲の緑道の草刈りもして、安全な学校環境にも積極的に関わっているとともに、保護者や地域住民が学校に対して安全意識をもつことができる。



- ・3月には父母教による窓掃除がある。校内の窓掃除をし、児童・教職員・保護者で安全・安心な学校作りを努めている。



6 成果と課題

【成果】

- 安全点検を学年でとりまとめているので、互いに声をかけ合い徹底することができた。
- 教職員が毎週登校指導を行うことで、児童の登校時の様子が分かり、各学級で具体的な指導につなげることができた。また、父母教の交通安全見守り活動との情報の共有もしやすくなり、児童の登校時の安全をよりよいものにすることができている。さらに、月に1回の下校指導も定着し、下校の様子を把握できるようになった。
- 避難訓練とスポット避難訓練を合わせると毎月実施している。これにより、1,000人を超す大規模校であるが、短時間で安全な避難方法を児童が身に付けることができている。
- 地域の特性として、大型ショッピングモールや駅が隣接し、人や車の往来が非常に多いが、教職員の下校指導や、父母教の放課後の見回り活動、地域ボランティアの見守り活動により、放課後の児童の安全面に対しても協働的な態勢をつくることができている。
- Google チャットを活用することで、地域からの情報や下校時の注意点を、迅速かつ確実に各担任が共有し、指導をすることができ、児童の安全面の向上につながった。
- 大規模災害を想定した引き渡し訓練には、多くの保護者が参加し協力的である。引き渡し名簿を使うことで、保護者が来られない場合も、誰に引き渡すのかを明確にすることができている。
- 安全マップを作ることや、登下校時、放課後にも大人が見守っていることで、児童自身も非常時だけでなく、常日頃から安全面に対する意識をもつことができた。委員会活動での呼びかけや、登下校時の交通ルールの順守など、自分の命は自分で守るという意識の向上につながっている。
- 美化作業を続けることにより、児童・教職員だけでなく保護者・地域住民にも学校の活動を知らせ、協力的に参加できている。

【課題】

- 児童数は減少傾向にあるが、今後も1,000人近くの児童数が続く見通しである。通学路を安全に登下校しているかは、継続して確認や指導をしていく必要がある。
- 放課後や休日での児童の遊び方や遊ぶ場所について、近隣住民の方から意見をいただくことがある。地域からの情報はすぐに指導に生かしているが、今後も地域と協働的に児童の安全を確保していく必要がある。
- 安全について学校と保護者、地域が連携していることを、より分かりやすく児童に伝えるアプローチを今後も考えていくことで、より児童自身の安全意識の向上が図れると考えられる。